次の文章は『枕草子』「うちとくまじきもの（気の許せそうにないもの）」の一部分である。よく読んで、あとの問いに答えよ。

こと舟見やるこそいみじけれ。遠きは、まこと[a]に笹（ささ）の葉を作りてうち散らしたるやうにぞ、①いとよく似たる。とまりたる所にて、舟ごと[b]に火ともしたる、をかしう見ゆ。※はし舟とつけて、いみじう小さきに乗りて漕ぎありく、[A]つとめてなど、いとあはれなり。「※あとの白波」はまことにこそ消えもて②行く。よろしき人は乗りてありくまじき事とこそ、なほおぼゆれ。[ア]徒歩もまたいとおそろし。されど、それは、いかにもいかにも土に着きたれば、いとたのもしと思ふ[c]に。[イ]海女のか※づきしたるは、憂きわざなり。腰につきたる物堪（た）へねば、③いかがせむとなむ。④男だにせば、⑤さてもありぬべきを、女はおぼろけの心ならじ。⑥男は乗りて、歌などうちうたひて、この※栲縄（たくなは）を海に浮けてありく。いとあやふく、⑦うしろめたくはあらぬにや。海女ものぼらむとては、その縄をなむ引くとか。まどひ繰（く）り入るるさまぞ[B]ことわりなるや。舟の端をおさへて放ちたる息などこそ、まことにただ見るだに、しほたるるに、落とし入れてただよひありく男は、⑧目もあやにあさましかし。さらに人の思ひかくべきわざ[d]にもあらぬ事にこそあめれ。

(注)※はし舟……………小舟。はしけ。
※かづく……………海にもぐって貝・海藻などを採ること。
※「あとの白波」……「世の中を何にたとへむ朝ぼらけ漕ぎ行く舟のあとの白波」(拾遺集)を受ける。
※栲縄……………楮の繊維から作った白い縄。ここでは「命綱」のこと。

問一　波線部**ア**「徒歩」、**イ**「海女」の読みを書け。

問二　点線部**A**「つとめて」、**B**「ことわり」の本文中での意味を書け。

問三　二重傍線部**a**～**d**の「に」の中で、次の文の傍線部分の「に」と文法的に同じものを一つ選んで、記号で答えよ。
「所の違ひたるにやとて、掘らぬ所もなく山をあされどもなかりけり。」

問四　傍線部①「いとよく似たる」とあるが、何が何にとてもよく似ているというのか。十五字以上、二十五字以内で説明せよ。

問五　傍線部②「行く」は文法的におかしい。正しい形に直せ。

問六　傍線部③「いかがせむとなむ」について、
Ⅰ　品詞分解として正しいものを**ア**～**エ**の中から一つ選んで、記号で答えよ。
ア　副詞＋動詞＋助動詞＋助詞＋助詞
イ　動詞＋助動詞＋助詞＋助動詞＋助動詞
ウ　副詞＋動詞＋助動詞＋助詞＋助動詞＋助動詞
エ　動詞＋助動詞＋助動詞＋助詞＋助詞
Ⅱ　口語訳せよ。

問七　傍線部④⑥の「男」は読み方が異なる。この説明として最も適当なものを次の**ア**～**エ**の中から選んで、記号で答えよ。
ア　④は「をのこ」と読んで一般的な男性を指し、⑥は「をとこ」と読んで夫の意を示している。
イ　④は「をのこ」と読んで夫の意を示し、⑥は「をとこ」と読んで一般的な男性を指している。
ウ　④は「をのこ」と読んで男の子を表し、⑥は「をとこ」と読んで成人した男子を表している。
エ　④も⑥もまったく同義として用いられている。

問八　傍線部⑤「さてもありぬべきを」、⑧「目もあやにあさましかし」の口語訳として最も適当なものを、それぞれ**ア**～**エ**の中から選んで、記号で答えよ。

⑤
ア　そのままでいられないだろうが
イ　全く変わってしまうであろうが
ウ　それでも確かによいであろうが
エ　しばらくでもいられるだろうが

⑧
ア　目もくらむばかりにばかげたことであるよ
イ　見る目もあやしむばかり不思議なことだよ
ウ　見ているとむやみに興ざめることであるよ
エ　目で見るに耐えないほど情けないことだよ

問九　傍線部⑦「うしろめたくはあらぬにや」とあるが、筆者は「誰の、どんなところ」を非難しているのか、説明せよ

問十　文学史についての次の文章に適切な語を漢字で書き入れて完成させよ。

「枕草子」は、Ⅰ時代に成立した作品で、文学史上のジャンルはⅡである。作者は、一条天皇の中宮であるⅢにお仕えしたⅣである。

問一
ア
イ
問二
A
B
問三
問四
問五
問六
Ⅰ
Ⅱ
問七
問八
⑤
⑧
問九
問十
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ

解答解説

作品紹介

「枕草子」は平安時代に清少納言によって書かれた随筆である。清少納言は、父に清原元輔をもつなど学者・歌人の家柄に生まれ、二十八歳ごろに一条天皇の中宮定子に仕えた。漢文の素養に恵まれ、「香炉峰の雪は簾をかかげて見る」（「雪のいと高う降りたるを」の中で白居易の漢詩の一節を行動で示した）は有名である。内容は、一般に「ものづくし」と呼ばれる類聚章段と日記的章段、随想的章段からなる。本文は「うちとくまじきもの」という類聚章段の一つである。

解答例

合計四十点

問一　ア　かち　イ　あま　1点×2　2点
問二　A　早朝　B　道理（もっともなこと）　3点×2　6点
問三　d　3点
問四　遠くに見える舟の様子が、笹舟を　散らした様子に　（よく似ている。）　3点
問五　行け　3点
問六　Ⅰ　ア　Ⅱ　どうしようというのだろうか　3点×2　6点
問七　ア　3点
問八　⑤ウ　⑨エ　3点×2　6点
問九　男の、女を危険な目にあわせているのに、平然と歌など歌っている　ところ　4点
問十　Ⅰ　平安　Ⅱ　随筆　Ⅲ　定子　Ⅳ　清少納言　1点×4　4点

解説

問一　基本的な読みである。アを「とほ」と読まないように注意。

問二　基本的な語句である。Aを「翌朝」としないように注意。

問三　文法事項では必須の識別問題である。「に」には、完了の助動詞（連用形につく）、断定の助動詞（体言か連体形につく・「に＋助詞＋あり」の形をよくとる）、格助詞（体言か連体形につく・「に」と訳せる）、接続助詞（連体形について文と文をつなぐ役割をしている）、形容動詞連用形の活用語尾（「いと」をつけて意味が通じたら形容動詞）、副詞の一部（「さらに」とか「つひに」など）の6種類が考えられる。例文は断定の助動詞。aは副詞の一部、bは格助詞、cは接続助詞、dが断定の助動詞で正解。

問四　直前の文から「遠くに見える舟」が「笹の葉を舟にして散らした様子」に似ているのである。

問五　文中に係助詞の「こそ」があるから、係り結びの法則により文末の「行く」は已然形でなければならない。「行く」はカ行四段活用だから已然形は「行け」となる。

問六　Ⅰは、文法の知識を問う問題である。「いかが」は副詞、「せ」はサ変動詞、「む」は推量の助動詞、「と」は格助詞、「なむ」は係助詞。ゆえにアが正解。Ⅱは、「なむ」のあとに「ある」を補って訳す。「腰についている物が切れたら」に続く文として「どうしようというのであろうか」となる。

問七　「男」は「をとこ」「をのこ」と両方読み、「をとこ」は女性の相手としての男性・夫・愛人という意味で用いられることが多く、「をのこ」は一般的な男性のことをさす。傍線部④は一般的な男のことをさし、傍線部⑥は海女の夫をさしている。

問八　傍線部⑤の直前に「男がするのならば」とあり、直後に「女は並大抵の気持ちではないだろう」とあるので、間には「そうあってもよいだろうが」という意味の文章が入る。それに「ぬべき」は「きっと〜だろう」という確述用法なのでウが正解。⑨は「目もあやなり」が「正視できない」、「あさまし」が「驚きあきれる・情けない」と知っていればできる。

問九　女が海中で危険な目にあっているのに、男が舟の上で歌なんか歌いながらのんびりとしているところを非難しているのだ。

口語訳

（舟の中にいて）他の舟を見やるのこそ、ひどく恐ろしい。遠いのは、本当に笹の葉で小舟を作ってうち散らしてある様子に、とてもよく似ている。舟泊まりしている所で、舟ごとに火を灯しているのは、おもしろく見える。

はしけと名づけて、たいそう小さい（舟）に乗って漕ぎまわる、（その）早朝（の光景）などは、たいそうしみじみとした趣がある。（古歌に詠まれた）「あとの白波」は、（歌の句の通り）本当にたちまち次第に消えて行くものなのだ。相当な身分の人は、（舟に）乗って動きまわるべきではないことと、やはり思われる。徒歩による旅もまた恐ろしい。けれど、それは何とか（足が）地に着いているので、とても安心できると思うので。

海女が潜水をするために（海に）入るのは、気がふさぐしわざだ。腰についている物が切れたら、どうしようというのだろうか。せめて男がそれをするというのなら、それでも確かによいであろうが、女はやはりなみたいていの気持ちではないだろう。（一方）男（夫）は舟に乗って、歌などを（のん気に）うたって、この栲縄を海に浮かべて（漕ぎ）まわる。女のことがとてもあぶなっかしく、気がかりではないのであろうか。海女も海面に浮かび上がろうとする時には、その縄を引くとかいうことだ。（その時男が）あわてたぐり入れるありさまは、もっともなことであるよ。（女が）ふなべりをおさえて（一気に）吐き出している息などは、本当にただ見ている人でさえ涙がこぼれるのに、（女を海中に）落とし入れて、ふらふら漕ぎまわる男は、いったいどういうことかと、目で見るに耐えないほどにあきれ果てたことだよ。全く人が思い及ぶべき仕事でもない事であるようだ。